



左から9代目、7代目、8代目の彌右衛門さん（1982年、昭和57年頃）

商売と地域貢献

祖父や父のふるまいは「質素儉約」。ただし、その儉約は、「必要な物を必要な時に買うため」と教えられました。祖父が良く言っていたのは「覚悟して生きろ」という言葉。それは「お前が生きていくうちに、必ず、大恐慌があり、天変地異があり、そして戦争がある——だから覚悟して生きろ。まるで『予言』に近い言葉でした。

祖父は、大和川酒造店の長男として生まれ、会津中学に進学し、地元でも優秀だと評判でした。自宅の酒蔵にはさまざまな文人墨客や著名人が出入りしていました。影響もあり、若い頃から俳句をたしなむなど、文化にも造詣が深かつたそうです。日露戦争の頃には陸軍中尉までになり、山形県鶴岡市出身の軍人・石原莞爾に傾倒。たびたび石原氏を喜多方に招いては、講演会を開催。太平洋戦争が始まると、在郷軍人会長や大政翼賛会長、警防団長など地域の役職をやり、招集令状を受けた多くの若者を戦地に見送りました。

彌右衛門さんは祖父から「会津は本当に豊かなところだ。そして「身土不二(しんどふじ)」（体と土地は切り離せない）、「四方四里（しほうしり）」（四里四方の地域で全てが貰える）と何度も聞かされていました。「会津には水もコメも麦も大豆もある。酒、味噌、醤油、川魚や山菜も豊かだ。歴史も、産業もある、漆器、工業もある。金も銅も出る。よそから持ってくることなく、ほとんどが間に合う」と。会津には戦前、民間の「会津電力」という電力会社があり、エネルギーも地元で貰える状態でした。

ところが太平洋戦争が始まると、国家総動員法により酒蔵が統合させられ、会津電力も接収されてしまいます。敗戦を

迎え、祖父はGHQによる公職追放第一号に。戦後は積極的に家業を拡大するよりも、地域貢献の活動に力を入れ、商工会議所や老人会の設立、喜多方市教育委員長として神宮長床の再建などに尽力します。「日本はアジアを支配するのではなく、アジアの中で生きていかないなどダメだ」「豊かなふるさとを守れ」という教えを残します。



伝統的な酒造りの商いを通じて地域貢献を続いている大和川酒造店



Vol. 20

江戸時代 寛政年間に創業
歴史刻み間もなく230年
に創業し、間もなく230年を迎える喜多方市の大和川酒造店（喜多方市寺町）。純米辛口「彌右衛門（やうえもん）」や、純米大吟醸「いのち」「四方四里（しほうしり）」など、数多くの銘酒を生み出しています。全国新酒鑑評会で8年連続金賞を受賞した定評ある味わいは、飯豊山の軟水の伏流水を仕込み水に、自社で立ち上げた農業法人「大和川ファーム」による酒造好適米を使い、伝統的な技術が生かされています。

会長の9代目佐藤彌右衛門（本名・芳伸）さんに、先々代、先代から受け継ぐ地域に根差した酒造りの歴史と文化について話を伺いました。

9代目彌右衛門さんは幼いころから、明治25（1892）年生まれの祖父・7代目彌右衛門（守一）さん、大正13（1924）年生まれの父・8代目彌右衛門（芳男）さん、祖父の弟で東京芸大を出た彫塑家の恒三（つねぞう）さんに囲まれ、さまざまな薰陶を受けました。

「家訓として伝わっているとか、わざわざ教えてもらうというわけではなく、生き様で教えてくれました」。その教えを伺いました。

生き様で
当主に受け継がれる薰陶

蔵をひいてきた親父

続く8代目彌右衛門は、喜多方を「蔵のまち」とする先鞭をつけます。視力が悪かつたために太平洋戦争で申種合格にはならず、喜多方市尋常小学校の教員として過ごしました。戦中に統合された数々の酒蔵は戦後、本来の蔵に分離独立して製造を始めます。ところが戦争責任を感じていた7代目が、家業の拡大をよしとしなかつたため、8代目は地域の人たちとの交流を深め、そこから、地域振興やまちづくり活動に精を出すことに山登りが好きで、「エーテルワイズ山岳会」「飯豊連峰護美会議」を結成して、自然環境保護にも尽力しました。

8代目は昭和53、54年ごろ、まさに高度経済成長期のまつだなかの時期、町並み保存連盟の全国会議で東海道の木曾宿や小樽運河の観察を重ねます。各地で街並み保存により地域づくりが進められている様子を目の当たりにし、「喜多方にも資源がある」と、蔵と蔵が持つ文化を活用した街づくりを思い立ちます。

8代目は昭和53、54年ごろ、まさに高度経済成長期のまつだなかの時期、町並み保存連盟の全国会議で東海道の木曾宿や小樽運河の観察を重ねます。各地で街並み保存により地域づくりが進められている様子を目の当たりにし、「喜多方にも資源がある」と、蔵と蔵が持つ文化を活用した街づくりを思い立ちます。

印象深かったのは、飛騨高山。街並み保存をしている地域で、訪れた観光客が、酒蔵にも足を運ぶようになりました。時間の経過とともに、観光客が増加し、地元の酒蔵が作った地酒が軒先で全部売れてしまう状況になりました。

当時、日本酒は「コストダウンで大量生産、大量消費」の時代。それに逆行し、地元で消費される地酒の展開を知った8代目は「山国には山国のに合った地酒がある。味噌田楽に合うのは、甘くて濃い酒。鯛（こい）のうま煮やウナギのかば焼き、喜多方の料理に合う喜多方の酒がある。俺たちは個性的な地元の酒を造ろう」と決意。そこで生まれたのが「寒造り甘美酒 伝家のカスモチ蔵守 彌右衛門酒」。それは大手酒造メーカーに対する、地元の酒蔵の意地であり、ゲリラ戦法でした。

同時に、地域に貢献する取り組みとして、喜多方の「蔵」を活用した地域づくりを推進。北は米沢、西に新潟という街道筋に位置する、物流と商人の結節点として、商いのまちである喜多方。「男40代で蔵1つ作らないと一丁前の男じやない」と言われる地域性で、「旦那」と呼ばれるには、蔵3つを持たないといけない——という商文化もありました。3つの蔵は、①作業用の蔵 ②家財道具を入れ

る衣装蔵 ③床を上げて畳を敷き床の間のある座敷蔵。

そういう文化背景もあり、喜多方にはたくさんの蔵がありました。床の間に絵や書が必要で、文人墨客がよく訪れていました。明治13年の大火で焼失した蔵もありましたが、8代目は一念発起して「蔵を引く」（蔵を譲り受けたままの蔵を引き受けた）ことを決意します。一世一代をかけた高額の投資（当時・7千万）で建てる）ことを決意します。一世一代をかけた高額の投資（当時・7千万）で建てる）ことを決意します。一世一代をかけた高額の投資（当時・7千万）で建てる）ことを決意します。一世一代をかけた高額の投資（当時・7千万）で建てる）ことを決意します。一世一代を

復活させ、水路を作り、水を引きました。自社も含めて喜多方市寺町に3つの蔵を上げられるに至り、話題を集めました。以上が訪れるようになりました。全国ラーメンの人気となり、「ラーメンの香りただよう喜多方のまち」として、年間20万人有数の観光地区になりました。

霧雨氣のある蔵のたたずまいに、最初は口コミで、やがてNHKのテレビで取り上げられるに至り、話題を集めました。



8代目彌右衛門が引いてきた蔵。「蔵のまち喜多方」のシンボルの一つ

芸術を通じて地域活性



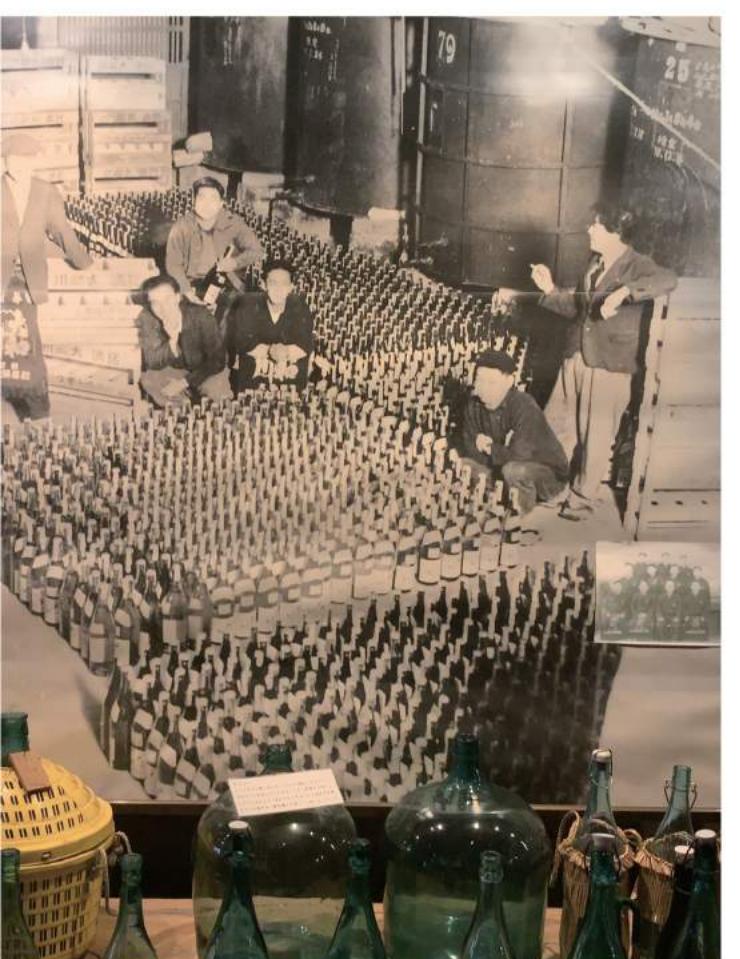
昭和電工喜多方事業所に建つ、9代目彌右衛門さんをモデルにした「アルミ太郎」。隣は作者の恒三さん

工喜多方事業所の「アルミ太郎」像（代

目彌右衛門さんがモチル）、郷土史家の二瓶清像（蔵の里前に設置）など、たくさんの中の作品を地元に残しました。

彌右衛門さんは、祖父の弟・恒三さんは東京を拠点に芸術活動をしていましたが、戦中疎開で喜多方に戻り、戦後は地域のデッサンの会「セピロマの会」を地元で設立。市内にある瓜生岩子の像、昭和電

15年を運んでいました。恒三さんは東京からも影響を受けました。恒三さんは東京を拠点に芸術活動をしていましたが、戦中疎開で喜多方に戻り、戦後は地域のデッサンの会「セピロマの会」を地元で設立。市内にある瓜生岩子の像、昭和電



大和川酒蔵北方風土館には、酒造りの歴史が保存されている

蔵が残ることは、蔵に伴つ年中行事や人々の心意気が残ること。喜多方、会津は、大雪、台風、大雨など天変地異も多く、自然是人間に優しくない。その中で生きるために大切にしてきた年中行事を護ることは大切なことです。先代は『不易流行』（変わるものと、変わらないもの）を見極めて、地域に貢献しました。

先代の姿を見てきた彌右衛門さんも、売り上げの三倍をかけて「飯豊蔵」の建設を計画します。大量生産・大量販売ではなく、地元の酒米と水を使つた丁寧な仕込みのための蔵。なによりも、「地元の人人が喜んでくれること」を目指します。

資金繰りを巡り、彌右衛門さんは8代目の父親に「担保にしたいから生命保険に入ってくれ。そうでなければ2000年の歴史がダメになる」と頼み込みます。すると8代目は「もう2000年もやつたらよっぽら（十分）だべ」と。「蔵が潰れてもいいのかい」と聞くと、「さすがねべ（いいんじやないか）。お前がやるんだから。俺は知らね」と、完全に事業を息子に渡します。

それを聞いて彌右衛門さんは「自分が最終責任者だ」と覚悟を決めました。人生最大の事業になる。そう確信し、自身で、一から投資・経営計画を見直します。

「利益と償却期間を考え、本気になつて、命がけで経営計画書を作つた。これが俺の最大の仕事。親父にやられたなつて思いました」。

（代）彌右衛門さんは言います。「親父が藏を引いてきたときには、『親父、おかしくなつたんじやないか。潰れるかも』

と思いました。でも、結果、大当たり。

財産は3つに分けて持て

先代からの薰陶は他にもあります。最大が、「財産は3つに分けて持て」ということです。

3つの財産とは、商売で必要な拠点としての「土地・不動産」、日々の商いで動かせる「現金」、そして人からの「信用」。戦後、公職追放された祖父の7代目は、地域のために献身しました。9代目彌右衛門さんが東京の大学を卒業して

喜多方に戻ってきたばかりで、まだ地元の団体に入れずについたとき、市の教育委員会から図書館の運営審議委員会委員就任の依頼がありました。「25、6歳の若造に声がかかるのも、じいさんや親父たちのおかげだ」と感謝しました。同時に長い時間をかけて築くのが信用で、金では決して買えないものだ」と実感。先代たちが残した「信頼」という大きな遺産でした。



7代目彌右衛門（佐藤守一）さん

震災―会津電力の立ち上げへ

彌右衛門さんが59歳と11ヶ月と11日を迎えた2011年3月11日、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故が起きました。「間もなく還暦。そろそろ引退かな」と思っていた矢先の出来事でした。「原発が爆発して、放射能が降つたら、人が住めなくなるかも。この豊かな会津や喜多方も、水や土やコメが汚染されて、酒造りができなくなるかも」と恐怖が走ると同時に、怒りもわいてきました。

その時、はたと、「覚悟して生きろ」と言っていた先代、先々代の言葉が浮かびました。

「いいか、お前が生きているうちに、必ず、大恐慌があり、天変地異があり、そして戦争がある。もしも天変地異や戦争、何かが起きたら、まず水を汲め。何よりも水だ」。その言葉を思い出した彌右衛門さんは、その教えに従って水を汲み、一升瓶に詰めました。酒蔵は酒造りに使うために自分で水源をもっていました。震災になつても、水は豊富にあります。

そこで、水を必要としている県内の避難者のもとへとその一升瓶に水を入れて運びました。



閑静なたたずまいの大和川酒店の酒蔵

自然エネルギーで地域自立



会津電力の雄国発電所のソーラーパネルの前に建つ9代目彌右衛門さん

震災前、飯館村で作つてもらつた酒米で地酒を作り、飯館で販売してもらつていたことが縁で、彌右衛門さんは飯館村を応援する「までの大使」になつていきました。もちろん、飯館村の人々の顔が浮かんできました。「飯館の人はどうしているだろう」。聞くと、避難しないで村内にたくさんの住民がいることが判明。飯館村にも一升瓶入りの水を運びました。

その後、友人で、同じく飯館村のまで大使を務める福島県立博物館長・東北大名譽教授の赤坂憲雄さんや、福島県

教育委員長（当時）の遠藤由美子さんらと話をするなかで、「これからることを話し合うために集まれる場を作ろう」と、事故から4か月後に福島大学で「ふくしま会議」を開催します。そこで集まつた仲間たちと議論を重ねるなかで、未来につなげる事業として、「再生エネルギーの会社を作ろう」と決意。



採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujyo



YELL

Vol. 20

2019年8月6日

発行：採用と教育研究所
〒960-8055
福島県福島市野田町6-7-8
電話 024-529-5153
info@saiyoutokyouiku.com

